

ラスベガスのホテル王は、
落札した花嫁を離さない

水野恵無

Emu Mizuno

目次

ラスベガスのホテル王は、
落札した花嫁を離さない 5

過去と未来 305

書き下ろし番外編

ラスベガスで一番幸せな私たち 327

ラスベガスのホテル王は、

落札した花嫁を離さない

プロローグ

『次の商品は珍しい、日本人の若い女性です！ 一万ドルから！』
 広い会場内にマイクの声が響き渡る。

私が立たされているステージは、上から強いスポットライトで照らされていた。扇形で囲むように階段状に並ぶ席。そこに座っている「客」の顔は暗くてよく見えないけれど、自分が見下ろされているのだけは分かった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。私はただ、失恋旅行に来ていただけだったのに。

『二万！』

『二万五百！』

『三万！』

『四万三百！』

『五万！』

会場のあちらこちらで英語が飛び交う。どうにか聞き取れる、金額と思われる数字がぼんぼんと跳ね上がっていく。ステージ上で震えている私を気にかけてくれる人は誰もいなかった。いまにも座り込んでしまいそうなくらいに、足ががくがくしている。

どうしよう。私、本当にここで「売られ」てしまうの？

『っ！』

ステージの端にいる進行役の人が会場の客に向けて何かを言う。英語が速くて聞き取れなかったけれど、その瞬間にざわっと大勢の男性の声が上がった。

『七万！』

『九万！』

値段の上がり方に勢いがつき、オークションが過熱していくのが伝わってくる。自分のことのはずなのに置いてけぼりにされて、周りだけが勝手に盛り上がっている。

恐ろしさに涙が出そうになった時、ドアが開いたのが視界に入った。ステージから見て客席の奥、階段の一番上だ。誰か入ってきたらしい。

『十万五千！』

一気に跳ね上がった数字に、どよめきが大きくなった。

これまで数字を吊り上げていっていた声がびたりと止まる。

『十万五千！ 十万五千です、他にいらっしやいませんか？』

進行役の人が会場内に呼びかける。

最後に買ねを叫んだ声が聞こえたほうを見た。最前列に座っているその人は、でっぴりと太った身体に脂ぎった顔をしていた。ステージを照らすライトの光に目を痛くしながらも見たそれに、嫌悪感でぞっと背中が冷える。

不安のあまり、私はステージに上がる前に着替えさせられた白いワンピースをそっと見下ろす。生地はいいけれどすごく薄い。さらに問題なのは、いま身につけているのはこれ一枚と下着だけだということだ。

高値を付けたおじさんと目が合い、ニヤリと下卑た笑いを向けられる。薄い布のすぐ下にある肌を視線で覗られてる気がして、鳥肌が立った。

あ、あんなおじさんに「買われる」の？

嫌だけれど、どうすればいいのかわからない。

会場の出入り口には黒いスーツの人が必ず立っていて、きつと逃げて捕まえられるのは目に見えている。この会場から外に出られても、荷物もない。お金もないし、パスポートだって。

頼れる知り合いも誰もいない。
でも、こんなのは……

私がつゅつと自分の身体を抱きしめた瞬間――

『では十万五千で――』

『百万』

響き渡る落ち着いた男性の声に、会場内がしんと静まり返った。

進行役の人がマイクを持ったまま戸惑う。

『なぜ、貴方がここにいらつしやるのですか？』

『百万だと言ったのが聞こえなかったのかな？』

『それは聞こえましたが……』

会話をしている相手の顔はライトのせいで見えなかったけれど、さきほど会場内に入ってきた人のようだ。客席の間にある階段をコツコツと革靴の音を鳴らしながら下りてくる。

他のお客さんの視線を受けて進行役の人が取り繕ったように咳払いをすると、またマイクを握った。

『失礼いたしました皆様！ 百万、百万です！ 他にいらつしやいませんか？』

呼びかけるけれど、みんな戸惑うか諦めていてるので誰も対抗しようとはしない。

さっき十万五千と言っていた太った男性も、悔しそうな顔はしていてもさらに大きな数字を言うことはできないようだ。太い指先がギリッと椅子のひじ掛けを握りしめている。

『では百万！日本人の女性は百万で落札されました！』
私を「買った」男性がステージの上まで上がってきた。見上げるほどの高い身長、ステージのライトに照らされて輝く金色の髪。身につけているのは仕立てのいいオーダーメイドスーツだと一目で分かる。サングラスをしていても分かるほど顔が整っている、思ったよりも若そうだ。

昨日の朝の米ドルのレートは一ドルが百四十円だった。

つまり一億四千万円で、この人は私を買ったということ!?

一 落札と恐怖

ラスベガスの夜はどこも煌びやかで、バーの中は誰かが選んだジュークボックスの音楽がかかっている。薄暗い店内のカウンターの一席で、私はちびちびと舐めるようにお酒を飲んでいた。

甘酸っぱいカクテルは有名な物語のヒロインをイメージしたものらしい。

せっかくアメリカに来たのだからそれっぽいものを飲んでみたいなと思ったのだけど、元々あんまりお酒には強くないからゆっくり口に入れるようにする。

『それで、結局彼氏に振られた理由は分からないままなんだ』

『そうなんです。別れようとメッセージが来てすぐにブロックされたので、連絡も取れなくなっちゃって』

『そりゃひどいね。だから失恋旅行?』

『はい。もうこうなったら思いきり気分転換してしまおうと思ったんです』

学生時代からの貯金を掴んで、就職して初めての長期休暇を利用してラスベガスに来たのだ。

ラスベガスを選んだ理由は特にない。ただ、人生で初めてできた彼氏にたった一か月で振られて、旅行会社のカウンターで「ストレス発散をするのなら」とおすすめされたのがここだっただけ。

まさか朝一に出発して、現地到着が日本時間の夕方になるくらい遠いとは想像もししていなかった。

とりあえずホテルに荷物を置いてご飯を食べに外に出て、帰りがけに見かけてなんとなく入ったバー。その席で声をかけてくれたのが、いま隣にいる男性だ。茶髪はともかく、高い鼻と彫りの深い目元や英語での会話が、アメリカに來たんだなど実感させてくれる。

『それじゃ、さっさ着いたばかりなんだ』

『はい。遊ぶのも観光するのも明日からで、楽しみです』
 大学は英文学科に通っていてよかったと思う。英会話の授業の成績はそこまで優秀だったわけではないけれど、こうしてコミュニケーションを取るくらいなら困らないから。

相手の男の人が少しゆっくり目に喋しゃべってくれているのもありがたい。いまはどうにかリスニングできている。困った時に役に立つかなとスロー再生機能付きのボイスレコーダーも買っておいだけれど、いまのところどうにか使わないうでいられている。

まあ日常会話ならどうにかなると思ったから、ツアーでもない女の慣れない一人旅行を選択したのだ。勢いが大部分だったとしても。

『え、それじゃ今日はもう何もしないの!? ホテルに帰るだけ!?』

『もうこんな時間ですし』

ラスベガスに合わせた腕時計はもう二十一時を指している。見知らぬ海外で女一人が出歩くにはそろそろ止めたほうがいい時間だと思う。

『ここはラスベガスだよ!? 夜も眠らない街でこんな時間に帰るとか、ハイスクールに通ってる子供ですらあり得ない!』

『え……そうなんですか?』

『当たり前だよ! これからがラスベガスの本番だよ、まったく』

大げさだけどアメリカ人らしいオーバーアクションで呆れられて、そういうものなのかと頷いた。確かにラスベガスのイメージは明るく輝くネオンだ。夜に遊ばないなんてもつたいない気もする。

『そうしたら泊まっているホテルの隣にカジノがあった気がするので、少しだけ寄ってみます』

ちびちび飲んでいたカクテルのグラスを傾けて最後まで飲み干す。とつても美味おいしくて気分が上向きになった。初対面の男性とこんなふうに話ができたのも、アルコールのおかげだろう。

席を立った私につられるように、隣にいた男性も立ち上がった。

『カジノに興味があるならちようどいい! 僕がよく行く、すつごくおススメの場所があるんだ。案内するよ!』

バーで声をかけてくれた男性に連れられたのは、ホテルなどのカジノではなかった。

『あ、あのやっぱり、私は他のところに……』

ラスベガスのメインであるストリップ通りから少し離れた道。近くに大きなホテルは見当たらない中、一棟だけ暗く沈んだビルだ。

明らかに異質な空気に警戒して引き返そうとしたけれど、その前に肩に手を回された。

『大丈夫だよ、そんな怪しい場所じゃないって。ほら、見てみな?』
促された先で、道路に黒いリムジンが停まった。一見して裕福そうだと分かる怡幅のいい老人が、黒いスーツを着た二人の男性を連れて異様な雰囲気のホテルに入った。『ここ、会員制のカジノなんだ。見た目は怪しいかもしれないけど、全然問題ない』
『で、でも』

確かにお金持ちそうな人が入っていったから、いきなり危険な目に遭うとかはないかもしれない。

でも、と思いつながら建物を見上げる。やっぱり海外で初対面の人に連れられて行く場所じゃない気がする。ここでなくても遊べる場所なら他にいくらでもあるはずだ。

そう思っただけで断ろうとした。

『ちょっとだけでもいいから遊んで? な?』

笑顔のはずなのにどうしてだか迫力を増した男の人に促されて、断りの文句が喉の奥で詰まる。気が進まないまま、私はそのビルに入ることになってしまった。

私の人生は地味だ。

特に勉強ができるわけでもないし、運動が得意なわけでもない。普通に公立の学校に通い、公立の高校に進んだ。

本を読むのが好きだったから英文学科に進学したけれど、やはり成績は可もなく不可もなく。就職も中小企業の事務としてどうにか拾ってもらった。

外見も美人というほどではない。ふわふわの天然パーマは梅雨の時期には広がって収拾がつかなくなるから短く切るわけにもいなくて、いつも肩より下の同じ長さ。色も染めたことがない。

性格も社交的なほうではなくて、友達はずっと一人か二人だ。あまり多くない代わりに深く付き合うから、就職したしまでも小学校の時の友達と仲がいいのは自慢かもしれない。

地味だけれど、そんな自分が嫌いではない。

放課後に友達と話をするのは楽しかったし、本を読んで色んな世界を体験するのも好き。毎日は平凡で特別な何かが起きるわけではないけれど、平穏な中で小さな幸せを積み重ねていくような日々だった。

そんな私の人生に起きた大きな事件が、取引先の人にデートに誘われたこと。いままで男性から声をかけられたことがない私は舞い上がった。可愛いワンピースを買って、少しヒールの高い靴を履いて、髪も天パが目立たないようにお団子にまとめた。そうして浮かれた初デートの終わりに告白されて付き合うようになり、幸せというのはこういうことなんだと思った。

けれど、幸せのピークはその初デートの日だった。

翌週の二度目のデートは、向こうの仕事のトラブルで約束の一時間前にキャンセル。メッセージの返信の間隔もどんどん空いて、二週間も音沙汰がなくなつて——初デートの日から一か月経った頃に『やっぱり付き合うのはなかったことにしてほしい。別れよう』とポツンとメッセージが来ただけ。理由を聞こうとしてもブロックされて通じないし、取引先の担当者も変わってしまったって、連絡が取れなくなった。

何も分らないまま振られ、落ち込んだ。初デートの日に何か失敗したのかなとか、その後のメッセージのやり取りで何か怒らせるようなこと言ってしまったのかなとか。

考えたけれどまったく心当たりがなく、思いつかないことにもまた気分が沈んだ。私はい時でも恋人になつた人の気持ちすら想像できないんだと。

そんな泣き言を大学時代の友達に言っていたら、「考えすぎもよくないよ。気分転換でもしてきたら？」というアドバイスをもらい、それならいままでやったことのないことをしようと思つた。一人での旅行も海外に行くのも初めてだけれど、きつとこんな機会でもないとい生実行には移さなかつただろうから、逆にいい機会をもらったんだ。そう自分を慰めるようにして来たのだけれど……

やはり少し思い切りすぎたのかもしれない。

初めての海外で、いつもはあんまり飲まないお酒を口にして、知らない男の人に声を

かけられて。普段とはかけ離れた環境に私も変に気が大きくなつていて、判断力や警戒心が鈍っていたのだ。

『あれ、また外れちゃつたね』

私の目の前には大きなルーレット台があった。隣にはここに案内してくれた男の人が座つていて、『次こそ当たるといいね』とチップを渡される。

だけれど、私は目の前に積まれたチップをそつと押し返した。

『あの、そろそろやめます。帰らないと』

そう言つて席を立とうとしたけれど、肩に回されていた腕にぐつと力が入り引き留められた。会つたばかりの人に密着されているというところに勝手に身体が震えて、俯いてしまう。

『帰るんならさ、お金払わないと』

『え?』

『俺が貸した分のチップ代、払つてくれるよね?』

『え、でも、そんなの知りません』

強引に連れてこられたカジノは、外からは想像できないほど広くて明るくて人がたくさんいた。身なりのよい人があちこちに座つていて、思い思いに遊んでいる。

カジノ自体初めてできまよるきよらしていたら男の人に『こっちだよ』と手を引かれて、

ルーレット台の前に座らされたのが少し前のこと。

『これならルールも簡単だし、知ってるでしょ？』

そう言われて『知りません』とも答えられなくて黙っていたら、男の人がディーラーに目配せをして目の前にチップを置かれた。ディーラーがボールをルーレットに入れると、『早く早く』と急かされる。

ディーラーやルーレット台の周囲にいる他のお客さんの視線に耐えきれず、私は目の前に積まれたチップを一枚摘んだ。だけど、『そんなつままない賭け方ないでしょ』と、手のひらにすべて載せられる。仕方なくそっと「赤」の上に置いた。結果は「黒」で、チップが回収される。

あまりにもあっさり終わってしまったってほげつとしていたら、またチップを渡された。

『残念だったね。はい、じゃあ次はどこにする？』

続けるのが当然のような空気に反論できず、同じことがこのあとに三回続いて、やっと「何かがおかしい」と気が付いた。二分の一角が四回連続で外れるというものもなくはないかもしれないけれど、嫌な感じがする。

そう思って帰ろうとしたのに、チップ代って……

確かに、最初から押し付けられるように渡されたチップをそのまま賭けてしまっていた。

『ここ、高レート台なんだ。だから君が負けた分はざっと五万ドルくらいかな』

『五万ドル!』

五万ドルって、一ドル百円の単純計算でも五百万円だ。

思わず大きな声が出て、周りの視線が私に集まる。その時にやっと、最初からそのつもりだったのだと分かった。男の人も、ディーラーも、恐らく同じ台に座っているお客さんらしき人たちもみんな。

『いまここで払えないんなら、別の手段で払ってもらうしかないね?』

『そん、な……』

ふらっと一瞬眩暈がして、後ろを歩いていた人におつかった。

『あ、すみません』

『いえ、こちらこそ』

慌てて振り返って頭を下げる。

アジア人らしきすらつとした体格で黒髪眼鏡をかけた男の人が、細い目を丸くして私を見下ろしていた。そりゃあそうだろう。どう考えても私はこの場には不釣り合いだ。でも同じ台の人たちの嫌な視線とは違う、純粹な驚きの表情に見えて、藁にもすがるような思いで「助けてください」と言おうとした。けれど言葉にする前に、黒髪の男の人に顔を逸らされる。

その時、スーツの上からでも筋骨隆々と分かるガードマンらしき黒人が反対方向から近寄ってきた。

『何かトラブルか？』

「あ……っ」

視線が一瞬逸れた間に、黒髪の男の人はいなくなってしまっていた。

私も同じようにその場から離ればよかったのに、まったく身体が動かず、黒人に腕を掴まれた。そして翌日にはステージ上に立たされていたのだった。



オークションが終わり、ステージから下ろされ、黒人に付いて裏手の通路を歩く。私以外のオークションも終わったようで、廊下の壁紙よりも白い顔で俯いている女の人が黒いスーツの男の人に連れられていた。恐らく私も同じような顔をしているのだろう。

足が震えてへたりこんでしまいそうな私に構わず、目の前の男の人は振り返ることなくずんずんと進んでいく。このまま逃走してしまいたい衝動にかられるけれど、同時に無駄だと理解していた。

『この部屋だ。入れ』

早口の英語で示されたのは、等間隔に並んだドアのうちのひとつだった。向こうに何があるのかを覚悟する間も与えられず、ドアノブが回される。

『早く入れ』

急かされて渋々と中に入った。

私が一晩閉じ込められた狭い部屋と違い、室内は間接照明の柔らかな光に照らされていた。そこには、大きくて座り心地のよさそうな三人掛けソファが向かい合って一つずつ。間に置かれた木製のローテーブルにはノートパソコンが広げられている。

ソファには白人の黒いスーツの男性と、さきほど私を落札した金髪の男性が座っていた。

『それでは支払いを確認しましたので、商品を引き渡します』

黒いスーツの男性がボタンとノートパソコンを閉じて立ち上がる。大事そうに小脇に抱えて、案内してきた男性と連れ立ってドアから出ていった。

部屋の中に、私を買った男性と二人で残されてしまう。

『支払いを確認した』ということは、百万ドルを一括で支払ったのだろうか。紙幣にしたらものすごい重量になりそうだけど、さっきの人が手にしていたのはノートパソコン一台だけ。

なんてことを考えてしまうのは、ただの現実逃避だ。

ラスベガスに到着したのがつい昨日の夕方だったなんて、信じられない。知らない人に騙されカジノで無理やり借金を背負わされて、オークションで売られたのも。

そして、ソファから立ち上がりこちらへ寄ってくる金髪の男の人に買われたという事実も。すべて夢ならいいのに。

「まさか、この僕が人を買うことになるとは思わなかったな」

「え？」

何を言われるのか、されるのか。震える指先をぎゅっと握りしめていたのだけど、出て来たのが日本語だったことにぼかんと口が開いた。

「日本語、喋れるんですか……？」

「あれ、僕の顔を見てもそういうことを言うの？」

男の人が驚いたようにサングラスを外した。

一瞬で目を奪われるほど、整った造作だ。印象的な蒼い瞳が柔らかく細められる。彫りの深い目元や通った鼻筋、僅かに上がった口角、白い肌。輝く金の髪といい、見上げるほどの高い身長といい、すべてが絵本の中から出て来た王子様のように完璧だ。

もしかしたら有名な人なのかもしれない。しがない事務職の私には一生かけても払えない大金を簡単に出せる人だから、お金持ちで有名で、色んな人に知られているのかも。オーラのようなものに圧倒されて思わず後ずさり、入ったばかりの部屋のドアに背中

が触れた。

相手のプライドを傷つけていたらどうしようと怖くなる。お金で人を買うことになんか躊躇ちゅうちゆもないのだ。まともなはずがない。

何かを考えている様子の男性を見つめているうちに、口の中がからからに渴く。

「……仕方がないな」

大きなため息とともに、男の人が私に背を向けてソファのほうへと戻っていった。突然暴力を振るわれなくてよかったと息を吐く。ちらりとすぐ後ろのドアを見た。このまま外に出て逃げるのはどうだろう。いまならあの大きな黒人もいない。

相変わらずお金もパスポートもないけれど、外に出て助けを求めれば——いや、だめだ。ここの建物がどんな造りになっているのかも知らないし、もし運良く出られたとしても、次に声をかけた人が助けてくれる保証は？ 昨日からまともで親切な人になんて会っていない。

下手なことをしてこの人の機嫌を悪くするほうが、もっとひどいことになるかもしれない。そんなふうを考えてしまい、自分がこれからどうなるのか想像もできず目に涙が浮かんだ。

「いつまでそこに立っているの？ こっちにおいで」

ソファの足元に置いていたらしいカバンを手にした男の人が、私のほうを見ている。泣きそうなを見られたくなくて俯いたけれど、足が震えて動けない。

ドアに寄り掛かったまま突っ立っていたら、不意に顔に影がかかった。どうしたんだろうと思うと同時に、膝の裏に回った腕で身体が持ち上げられる。

「きゃあっ!?!」

「おいでよ」

強引に移動させられ身体が強張こわばったけれど、近くで見ると男の人の表情は怒っているようには見えなかった。いわゆるお姫様抱っこというもので私を持ち上げているはずなのに、ふらつく様子もなく、すたすたと部屋を横切っていく。気が付かなかったけれど、この部屋には二つのドアがあったらしく、男の人は反対のドアから廊下に出た。

絨毯じゅうたんが敷かれ壁に絵画も飾られている空間を見て、どうやら私が歩かされたのは裏側の通路で、こちらはオークションに参加した「お客さん」のための通路らしいと気が付く。等間隔に並んだ部屋の中で、誰かが同じように引き渡されているのかと思うと、ぞっとした。

「あの、自分で歩けます」

「大丈夫だよ、このまま僕に任せて」

やんわりだけでも明確に拒絶されてしまうと、何も言えなくなる。

途中誰ともすれ違うことなく、エレベーターに到着した。表示される階数表記に、これまで地下にいたことを知る。どうりで部屋にも廊下にも窓がないはずだ。

外はもう暗かった。ここに来た時にも見上げた暗いビルを、男の人の肩越しに確認する。この建物の地下で人身売買が行われているのだと事前に説明されていたとしても、信じなかっただろう。

男の人は外に出ても下ろしてくれる気配がない。ただ、抱き上げる腕に乱暴さは感じなかった。買った相手に対して不思議だけど、壊れ物を運んでいるようだ。抵抗するべきか、大人しくしておくべきなのか。どうすればいいのか悩んでいたら、黒塗りのリムジンがすーっと目の前に滑り込んできて停まった。

男の人が当然のようにドアを開くと、中に乗せられる。車はまずいのではないかと思いつつも、どうすることもできない。

車の中は、天井が高くて広い空間になっていた。椅子も車のシートというよりソファのようで、進行方向に対して横向きに備え付けられている。対面にはグラスの載ったローテーブル。その脇には小さな冷蔵庫のようなものであった。これを一口に「車」とくくったらいけない気がするほど、いままで想像もしたことのない別世界だ。

「リムジンはそんなに珍しいかな?」

「ええと……あの、はい」

顔くと、あとから乗り込み隣に座った男の人がくすくすと笑った。顔の造作がとても整っているからか、動きの一つ一つが全部さまになっている。

「名前は何？」

「え？」

「君の名前、教えてよ」

「……美緒です。西村美緒」

「可愛い名前だね。じゃあ美緒、何か飲みたいものはある？ ワインでもビールでも欲しければ出せるよ」

「……大丈夫です。それより、どこに向かっているんですか？」

問いかけると、彼はローテーブルの上に重ねられていた雑誌を手に取った。

「さすが、ルークはいい仕事するなあ」

そう言いながら、表紙を見せられる。そして、大きく写っている人物の背景の建物を指でさし示された。

「ここに写っている、僕のホテルだよ」

連れてこられたのは、旅行のパンフレットでも見た、見上げるほど大きなホテルだった。ネオンの輝く建物は宿泊施設だけでなく、商業施設も付いているらしい。カジノ

はもちろん、敷地内には散歩できそうな広い中庭やプールもある。

中に入ると、テレビでも観たことがないほど豪華な部屋に案内された。中央にリビングに置くような三人掛けのソファや猫足のローテーブルがある。それだけでも驚くのに、ベッドルームは別らしい。壁は一面がガラス張りの窓になっているけれど、ラスベガスの中心部に建っているのにはほとんどネオンが見えないのは、この部屋が最上階だからなんだろう。

ホテルの個室だとはとても思えない。一人暮らししている私の家よりも広いし、キッチンまで備え付けられている。

男の人に手を引かれ、部屋にあるソファに座るよう促された。ふかふかなそれに、お尻が沈む。

そうして、隣に腰を下ろした彼に車から持ってきた雑誌を渡された。見れば、ローテーブルにも異なる雑誌が何冊も重ねられている。

「英語は読めるよね？ これ、全部僕だから」

「え……ええと、はい」

私は、言われるまま受け取った雑誌に目を落とした。

表紙には確かに、いまソファの隣にびったりと身体をくつつけるようにして座っている男の人が写っている。モデルさんか俳優さんかなと思ったけれど、この雑誌は真面目

な経済誌だ。

『若くして事業を成功させたラスベガスのホテル王、ウィリアム・ローランド』

「そう、それが僕」

雑誌の一文を読み上げると、日本語で肯定される。

他の雑誌の表紙もすべてこの男の人で、ばらばらと目を通した写真付きの記事の内容はどれも大差なかった。

目の前の男の人は、キラキラした金髪や透ける蒼い瞳、彫りの深い顔立ちのどれをとつてもキレイだ。それだけでなく、すらっとした立ち姿も、いまみに座っている姿も、動作のすべてが洗練されていて格好いい。モデルだと言われても違和感がない。いやそこらへんのモデルよりよほど見栄えがするし、華がある。同じ空間で隣に座っていても、どこか別世界にいるような感じ。

雑誌の表紙を飾っているのも、記事のインタビュー写真よりもスナップ写真が多いのも、納得だ。

これだけ格好よくて、しかも肩書きもすごいなら、かなり有名なんだろう。

記事の中には語学が堪能なことも書かれていた。ヨーロッパ各国だけではなく、日本、中国、タイなどのアジア諸国でも通訳が必要ないらしい。

なるほど。彼が日本語を喋れることに驚いた時の反応の理由が分かった。初対面の相

手でも顔やステータスが知られているのが当然の人だから、意外に思われたんだ。「申し訳ありません。私、貴方のことを全然知らなくて……」

「改めて名乗ったほうがよさそうだね。僕はウィリアム・ローランド。ここは僕が建てたホテルで、ニューヨークをはじめいくつかの国や都市にも所有してる。いまちょうど、日本にも二棟目を建設中だよ」

「あの、ローランドさん」

「ウィル」

「え？」

「僕のことはいルと呼んで、美緒」

「えっと、あの」

男の人名前や愛称でなんて呼んだことがない。しかもローランドさんは私を「買った」相手なのに。そう考えると、急にその事実が重くのしかかってくる。

「それは……『命令』、ですか？」

「ん？」

横を見上げながら問いかけると、ローランドさんがきよとんと隣まはたきをした。表情は自然だけど、その分何を考えているのかよく分からない。

ローランドさんが柔らかに笑う。

「僕は美緒に『命令』なんかしないよ。ただ『お願い』をしているだけ。美緒に『ウィル』と呼ばれたいなあつて」

この人は何が目的で、私みたいなただの一般人を一億円もの大金を出して買ったのだろう。この人にとって、一億円ははした金なのかもしれないけれど、意味もなく人を売買なんてしないはずだ。

私は、ごくんと生唾を呑み込んだ。

「あ……貴方は、なんで私を買ったんですか？」

もしかしたら想像もしないような恐ろしい返事をされるのかもしれない。けれど聞かずにはいられず、恐怖を抑えつけて彼を真っすぐに見つめた。

ローランドさんはもう一度瞬きをして、道行く女性を全員誘惑してしまいそうな笑顔で微笑んだ。

「そんなの決まっているじゃないか。美緒と結婚するためだよ」

一瞬間を言われたの自分からなかった。

呆然と見上げると、ローランドさんの大きな手で頬を撫でられる。

「美緒と結婚するためだよ」

形のいい唇がもう一度同じことを言った。私の空耳でも聞き間違いでもないらしい。「僕も聞きたいのだけど、美緒はどうしてあんな場所にいたの？」

「わ、私は、騙されて」

「そうか。まあそれ以外にはないよね」

ローランドさんが笑顔を消して、真剣な表情で私の顔を覗きこんできた。澄んだ蒼い瞳に真っすぐ見つめられ、一瞬心臓が跳ねる。

「あそこに集まるのはね、お金でなんでも解決できると思っていて、実際にそうしてしまえるだけの力のある奴らばかりだ」

「……っ」

「美緒のように、可愛くてか弱い女性を好きだけ鬨ってゴミみたいに捨てるような奴らなんだよ」

想像していたことが現実だと教えられて背中が冷えた。貴方も同じですか、なんて聞きたくても聞けない。肯定されたくない。

ローランドさんが私の頬から手を離すと、突然ぎゅっと抱き寄せられた。見かけよりもがっしりした胸元に顔が埋まる。男の人にこんなふうには接触するなんて初めてだ。ふわりと爽やかでどこか甘い香りに包まれ、眩暈がした。

「ねえ美緒。……いますぐに君のすべてを僕のものにしてもいい？」

「え？」

ローランドさんの顔を見ようとする前に抱き上げられた。車に乗る前の横抱きと違っ

て、縦にかかえるような体勢だ。

背の高いローランドさんをさらに上から見下ろしてしまった。

「あそこにいた奴らのようなひどいことはしないから大丈夫だよ」

ローランドさんが何を言っているのか、頭が理解しようとするのを拒否する。けれど急ぎ足で移動して連れて行かれた先に、大人が三人でも余裕で寝られるくらい大きいベッドがあるのを見て、喉がひゅつと鳴った。

嫌な予感ほどよく当たる。

ローランドさんにベッドの真ん中にそつと下ろされて、肩を押された。優しそうな顔だけで力は強くて逆らえず、簡単にベッドに沈められる。

「ローランドさ、ん……」

強張った私の顔を見て、ローランドさんの澄んだ瞳が揺れた気がした。だけどそれは一瞬のことで、頬をそつと大きな手で包まれ、端正な顔がゆつくりと近寄ってくる。

振られた彼とは一回デートをしただけ。抱きしめられたり、手をつないだりすることもなかった。もちろんキスも。

——いやっ！

ローランドさんが唇を重ねようとしているのが分かって目をぎゅつと瞑ると、頬に柔らかな感触と、ちゅつという小さな音がした。恐る恐る目を開けると、ローランドさん

が困ったように笑いながら私を見つめている。

男らしい指先が私の唇に触れた。

「ローラン——」

「ウイル。ウイルって呼んでよ、美緒」

「そんな……わけには」

やっぱり男の人を、しかも初対面のよく知らない人を名前で呼ぶなんて無理だ。

「僕たちは結婚するんだよ？ そんな他人行儀に呼ばないでほしいな」

「……っ！」

「ねえ美緒、ウイルって呼んで？」

それは確かにお願いの形だったけれど、命令に近かった。彼の中では私との結婚はもう決めたことらしい。

そのために私を「買った」のだ。買われた私に逆らう権利なんてない。

「うい……ウイル、さん？」

「他人行儀に呼ばないでと言っただろう？ ウイルだよ、ウイル。ほら美緒、ちゃんと呼んで？」

「……ウイ、ル？」

求められるままに震える声で繰り返すと、ローランドさん——ウイルがにつこりと嬉

しそうに微笑んだ。うん、と目を細めて頷いてくれる顔から目が離せなくなる。

「美緒、もつと呼んで」

「ウイル……さん？」

「どうして戻ってしまうの？ ウイルだよ、ウイル」

「うい……ウイル」

「うん、そうだよ。もう一回」

「……ウイル？」

「もう一回呼んで」

「ウイル」

「嬉しいよ、美緒。もつと、もつと呼んで」

「ウイル？ ウイル……ウイ、……っひあー！」

言われたことを繰り返すみたいに名前を呼んでいたら、ウイルに耳元へキスをされた。ぞくりと背中になんかが響いて変な声が出る。

ウイルの楽しそうに笑う低い声が、耳から頭の中に直接響いた。

「美緒は声も可愛いね。そんな可愛い悲鳴を聞いたらくさん啼かせたくなくなってしま
うよ」

「え……ひゃ、ああっ！」

ぴちゃ、と水音がしたと思ったら、耳たぶを食べられた。

「や……っつ、そこ、んっ！」

「ここ、好きかい？」

「や！……っつ、や、好きじゃ……ふあっ」

跳ねそうになる身体を、ウイルの胸板で押さえつけられた。

耳の形をなぞるように熱い舌が舐めてくる。水音が直接頭の中に入ってきて、なんだかよく分からない初めての感覚が身体の奥で生まれそうな予感があった。

いままで経験のないことに対する怖さが湧き上がって、やめてほしくて目の前の肩を押し返そうとする。

「大丈夫だよ、怖いことはしないから。僕に全部任せてくれればいい」

ウイルが耳元で話しながら、私の手首を掴んで肩から離す。そして、指先にちゅっとな音を立ててキスをした。

「美緒は指先まで可愛いね」

結果的に耳から離れてくれたことにほっとしながら彼を見上げた。

視線が合うと、ウイルの目がゆるりと細くなる。けれど私の服を見て、困ったように微笑まれた。

「この服は美緒のものじゃないよね？」

「あ……は、はい」

身体のラインがそのまま出てしまう薄くて白いワンピースは、あのオークションがはじまる前に着替えさせられたものだ。私の私物は洋服も含めてすべて取り上げられてしまっていて、何一つ持っていない。

頷くと、ウイルの眉間に皺しわが寄った。顔が整っている人の怒っている表情は迫力がある。明らかに機嫌の悪いオーラをまとったウイルに威圧されて、びくっと肩が揺れた。

すると、はっとしたウイルが空気を変えるように微笑む。

「美緒に怒ったわけじゃないよ。……でもごめん、この服は脱がさせてほしい。美緒が他の人に渡されたものを着ているのは不快なんだ」

「え……？ きゃうっ」

突然ワンピースの裾を捲めくられて、頭から引き抜かれた。それが無造作に床に投げ捨てられると、私の身体を隠すのは下着だけになる。

「いやっ！」

買われた立場だとかそんなことは頭の中から飛んで、胸を両手で隠して背中を向けるように身体を丸くした。こんな突然、男の人に身体を見られるなんて。

耳まで熱くなって目に涙が滲にじんだ。

「恥ずかしがらないで、美緒。僕も脱ぐから素肌で触れ合おう？」

後ろでスーツを脱いでいるような音が聞こえたかと思ったら、背中にびったりと温かい素肌が触れた。

そして、身体を包まれるように覆いかぶさられる。

「こっちを向いて」

「む、む、無理、ですっ」

自分が服を着ていないだけでも恥ずかしくて頭が沸騰しそうなのに、振り向いたら裸のウイルもいるなんて。より一層背中を丸めたら、肩のあたりでちゅっと音がして柔かい感触がした。

何をされたのかは分かっただけで反応できないでいたら、ちゅっ、ちゅっ……と背中のあるところで同じ音が聞こえてくる。

薄そうに見えた彼の唇は、肌で感じるととても柔らかくて、どこかくすぐったくて、なんだかドキドキする。

「ね、美緒。こっちを向いてよ」

背中へのキスの合間にまた言われたけれど、近くにあった枕に顔を押し付けながら必死に首を振った。耳まで熱すぎて無理だ。こんな顔、誰にも見せられない。

「どうして？ 恥ずかしい？」

ウイルの言葉に今度は何度も頷く。すると、くすぐすと楽しそうな笑い声が聞こえた。

「美緒は可愛いな。そんなふうに応えられたら、もっと虐めたくなくなっちゃうよ」
 ウイルの大きな手が私の背中に触れて、ぶつんとブラジャーのホックを外された。
 流れるような動作で、下着までもが下ろされて足から引き抜かれる。

「やっ！ だめっ！」

「美緒の全部、僕に見せてね」

背中にも度々音を立ててキスをされる。時々肌を舐められて、その感触にぞくんと身体が震えた。

手で胸を隠しながら必死に背中を丸めるけど、洋服をすべて脱がされてしまったせいでそれ以上身動きができない。

「こつちを向いて？ この肩も丸くて可愛いけれど、顔を見せてよ」

ウイルスがそう言って、背中にまたちゅつと音を立ててキスをした。

私を買ったのはやっぱりこういう目的だったのだと、浮かんだ涙を飲み込むように固く目を瞑る。

「仕方ないな。部屋を暗くすれば少しは平気？」

ウイルスの動きに合わせてベッドが揺れ、ピッピッと音がした。瞼の向こうが暗くなる顔を上げると、さっきまで煌々こうこうとついていたライトが消えている。

あとは、ベッド下のほんやりしたフットライトだけになっていた。

「やっ顔を上げてくれた」

「え」

聞こえた声が近かった気がして横を向くと、すぐそこにウイルスの顔がある。

ベッドヘッドのパネルを操作してライトを消したんだと気が付くのと、頬にまた音を立ててキスをされたのはほぼ同時。

目の前の端整な顔に緊張して、反射的にぎゅつと目を閉じる。

「ごめんね、美緒」

「え？」

何を謝られたのか分からなくてさっきと同じ言葉を返すと、ころりと身体をひっくり返された。

慌てて瞑ったばかりの目を開くと、下着一枚しか身につけていないウイルスが私のの上において、真つすぐ目が合ってしまう。

「あ……嫌あつ！」

ワンテンポ遅れて、自分の状態を思い出す。

下着すら身につけておらず、素肌を晒しているということ。

せめてもの抵抗でまたうつぶせになろうとしたけれど、肩を押さええられて動けなくなった。強い力ではないのに、起き上がることすらできない。

「……あ」

喉の奥で悲鳴が凍った。

自分がこれから何をされるのかが、これ以上ないほどに現実として襲ってきて、目の前が暗くなる。

「買われる」というのは、こういうことなんだ——

「美緒、美緒っ」

「っ！」

名前を呼ばれて、ふっと目の前に焦点が合った。私を見下ろしているウィルの顔が見える。

一瞬恐ろしい怪物のように思えたのに、私を真つすぐに見つめる視線に剣呑さけんおんはどこにもない。

「大丈夫だよ。いきなりで怖がらないうのは無理かもしれないけれど、絶対にひどいことはしないから」

「……ウィリアムさ、ん」

「ウィルだよ。ウィルって呼んで、美緒」

優しくて甘さも含まれているような声音に、一瞬前の恐怖がふっと薄まる。素肌の肩に触れている大きい手が怖いと思っていたけれど、いまやっとその温かさに気が付いた。

薄く涙の膜が張っているのか、ぼんやりとした視界の向こうのウィルを見上げた。

「……ウィル？」

「ねえ、僕の胸に手を当ててみて」

「え……あ、はい」

片手で両胸を隠しながら、そっと反対の手を伸ばした。ウィルの素肌に触れた一瞬、電流が走ったみたいに感じて思わず離してしまう。

「……どく、どく、どく、どく、どく、どく。」

手のひらに鼓動が伝わってくる。

「……すぐく、速いです」

「うん。緊張しているからね」

「ウィルが？ どうしてですか？」

女性の扱いに慣れていそうで、緊張とは無縁に見えるけれど。人を買ってこういうことをするのは初めてではないんじゃないの？

「美緒がこんな無防備な格好で僕の目の前にいるんだよ？ 緊張するなというほうが難しい」

その無防備な格好にしたのは、この人自身なのに。

恨みがましい気持ちもあるけれど、それと同時に手のひらに感じる温かさや音がどこか心地いい。

「私と同じくらいの速さ……」

「ねえ、僕も美緒の心臓の音を確認していい？」

「……はい」

接触することに対する抵抗感を抑えて頷いた。

大丈夫、胸の音を確認するだけ。そう自分に言い聞かせて、ぐっと身体に力を入れる。

「ん……っ」

「確かに、すごくドキドキしているね」

「……はい」

ウイルは、胸と胸の谷間に手を差し入れるようにして肌に触れた。彼の手のひらが熱い。

男の人の手をこんなふうな素肌で感じたことなんてなくて、ますます緊張して鼓動が速くなる。

「美緒は僕が怖い？」

「……」

本当のことを伝えていいのか分からなくて一瞬悩んだけれど、嘘をつくこともできず

小さく頷いた。困ったようでもどこか傷ついたように小さく微笑まれ、なぜか私の胸がズキンと痛む。

いたたまれないような気持ちになっていると、シートと背中の中に腕を入れて身体を起こされた。

「あの……?」

「少し落ち着くまでこうしていようか」

膝の上に横向きに乗せられて、広い胸に包まれるように抱きしめられる。

お互いの素肌の間に隙間がなくなる。

「これなら美緒の身体も見えないし、恥ずかしさもマシだと思っただけど、どうかな?」
どうと聞かれても困る。

確かにここまで近づいたらあんなところやこんなところを見られる心配はないかもしれないけれど、服を着ていないことに変わりはないから、マシも何もない。

恥ずかしいものは恥ずかしくて、身体がぎゅっと強張っているのが自分でも分かる。どうしよう。どうすればやめてもらえるんだろう。そもそも私に拒否する権利なんてないんだろうけれど、それでも思ってしまう。このまま何事もなく朝を迎えたい。ぐっとまた身体に力を入れると、何かの音が聞こえた。

——どく、どく、どく、どく、どく。

私の心臓と同じですごく速い、ウイルの胸の音。ふっと肩の力が抜ける。緊張しているのは自分だけではないという、妙な安心感に包まれる。

もっとよく聞きたくて、耳を胸に押し当てようにもぞりと動いた。

ウイルが少しだけ腕の力を弛めたので、私はちよどいい位置を見つけてまた胸に耳を付ける。

「美緒」

ふわりと柔らかく名前を呼ばれ、私は顔を上げた。

思ったよりもずっと近くにウイルの瞳があつて、真つすぐに視線が絡む。ドクンとまた心臓が大きく鳴る。

蒼い瞳が揺れたと思つたら、頬にちゅつと音を立ててキスをされた。続けて、鼻の頭、反対の頬、前髪をそっと上げられて額にも。くすぐったさに状況も忘れて思わず笑つてしまう。

「少しは落ち着いた?」

こつんと額同士をくつつけながら問いかけられる。

落ち着いたの、かな。相変わらず指先は震えているし、逃げ出したい気持ちでいっぱいだけれど、さっきまでの目の前が真つ暗になるような恐怖はなくなった気がする。

小さく頷くと、ウイルが安心したように目を細めた。鼻の頭をすりすりとしこすりつけられる。

「これから僕は色んなところにキスをするけれど、怖がらないで。美緒が平気になるまで、キス以上のことはしないようにするから」

「……っ。は、い」

これ以上「嫌だ」とは言えなかった。

そつとベッドに寝かされ、つま先が冷える。

部屋が薄暗いといつてもフットライトはついていてから、まったく見えないわけではない。身体を隠せるものは何もない。

「美緒、大丈夫だよ。少しずつ、僕に触られることに慣れるところからはじめよう」上から覆いかぶさられると、耳元で囁かれた。そこにまたちゅつと音を立ててキスをされて、びくんと肩が揺れる。ちゅつ、ちゅつ……と音を立てながら、ウイルの唇が私の肌をなぞるようにおりにいく。耳から首筋、鎖骨から肩。そして胸を隠している二の腕にも。

恥ずかしい場所の近くに男の人の顔があるという事実には緊張してしまう。でもウイルは気にした様子もなく唇で触れていき、指先にまでキスをされた。

ふと顔を上げたウイルと目が合う。そのまま少し下にずれたのを感じて、お腹の奥が

ひゅっとする。それ以上進まれると恥ずかしいところに行ってしまうのではないか——そんな不安にくらりと眩暈がしたけれど、ウィルはもつと下まで移動し私のつま先を持ち上げた。

足の指先にもまた、ちゅっとな音を立ててキスをされる。

「やっ、そんなところ……汚いですっ」

「大丈夫だよ。どこも柔らかくて甘くてすごく可愛い」

「ひあっ!？」

いままでキスをするだけだったのに、突然つま先をぺろんと舐められた。一度だけではなく、何度も何度も丁寧に、まるで味わうようにねぶられる。

「やっ……ん、そんな……っ」

そんなところを舐められるなんていままで想像したこともない。だから現実感がまだないのに、舌のぬるっとした感覚は何よりもリアルだ。足の裏を舌先でつつ……と辿られて、くすぐったさに「ひゃあん！」と変な声が出た。

離してほしいのに、足首をしっかりと掴まれているせいで、なす術がない。

「舐められるのも嫌いじゃなさそうだね」

「……え？」

私の顔を見たウィルが、にっこりと笑った。薄暗い中でも確認できるとてもキレイな

笑顔に、どうしてだか嫌な予感が湧き上がり、そして現実になった。

「だめ……、だめえっ」

「美緒、可愛いね……美緒」

何度も何度も名前を呼ばれながら、少しずつ足を舐められる。

爪から、指の間、一本一本、足の裏から足首、ふくらはぎ、膝、太もも……それらを熱い舌が舐めながら上がってくる。

だめと言っているのにウィルが止まる気配はない。

舐められると背中がぞくぞくするからやめてほしいのに。ウィルの舌に熱を灯されてみるみたいに、身体が熱い。どんどん力が入らなくなっていく。

「ねえ……今度はこれも舐めていい？」

「……は、え？」

頭がぼんやりしていたせいか、何を言われたのかよく分からなかった。

足元から上のほうに来たウィルに手首を掴まれて、そつと持ち上げられる。ふと頭のどこかで「あれ？」と疑問が湧く。

そんなふう腕を外されたら、胸が見えてしまうのでは？

「嫌じゃなさそうだから、舐めさせてね」

「ひゃ、ああっ」

自分がどうなっているのか理解した時には、すでに両手首をシートに押し付けられていて、胸の先をぼっくりと啜くわえられていた。信じられない光景を目の当たりにしてしまい、頭の中で熱くなる。

けれど、それ以上に何かが背中をビリビリと走る感覚に驚いた。

「あ、あつ！ や、なに……っ、あ、んんっ」

ウィルの舌が胸の先端を転がすように舐めるたびに声が出る。体温が上がる。

自分の中から何かが溢れていくような感覚。

逃げたくても両手首を押しさえつけられているせいで、ただ受け止めることしかできない。

「ここ、気持ちいいんだね」

「……っ！」

息が止まるかと思った。何それ。私は初対面の男の人にこんな強引なことをされて、

「気持ちいい」の？

「うそ……そんな、ひゃあんっ」

「……ん。ほら見て。ここが真っ赤になっているよ」

ウィルが赤い舌を出して私の胸を舐めた。舌の赤さと変わらないくらい真っ赤になった私の胸に、フットライトの光がてらてらと反射している。卑猥な光景を見せられて、

ぞくんとお腹の奥が震えた。

そんな私を見て何を思ったのか、ウィルが微笑んで手首を離してくれる。ほっと息をついた瞬間、ウィルの指先が私の脚の間に入り込んだ。ぬるん、と長い指先が滑ったのが分かる。

「っ！」

「こつちも、準備がよさそうだね」

「あ、……や、や、うそ」

ウィルの顔がまたおりていくのが妙にゆっくり見えた。

太ももを抱えられると、膝を開いて立てさせられる。ウィルの目の前に私の一番恥ずかしいところが……

「だ、あつ……ひゃあああつ!?!」

だめと言う前に、吸い付かれた。キレイな場所ではないのに躊躇なくウィルがそこに唇を付けて舌を動かす。

いままでの比ではない刺激に背中が浮いて、シートを掴むだけで精一杯だ。

「あつ、あ……っ！ ああんっ」

「すご……い。美緒のここ、甘くて、美味しい」

「や……っ、だめ、変……っ、変になっちゃ、んんっ」

「大丈夫だよ、気持ちいいだけ。もっと、気持ちよくなって？」
 「あ、あ、あつ！ あ、それ……っ、やめて、くださ……ひうんっ！」
 じゅるる、と音を立てて吸い上げられたかと思うと、なんだかよく分からない場所を舌で転がされた。ウイルスに何かをされるたび、脚の間から背中を伝って頭の芯までビリビリする。

太ももをウイルスの肩に乗せられるように抱えられているから、ほとんど動けない。打ち上げられた魚のようにびくびくと身体が跳ねる。

「や……っ、こわい、こわいです……っ！ 変、に、なるう！」

「美緒、大丈夫だよ。みーお？」

なだめるように名前を呼ばれて、私は固く瞑っていた目を開いた。涙で滲んだ視界にウイルスの顔が映る。

舐めるのはやめてくれたけれど、代わりに指で入り口をくちゅくちゅとかき回されているので刺激は減っていない。ふるふると首を横に振ってやめてほしい意思を伝えたくれど、困ったように笑われた。

「美緒はここ、自分で触ったりしないの？」

「お、お風呂……でっ」

「身体を洗うためでなく、気持ちよくなるためだよ」

「そ……そんな、のっ。するはず、ありません……っ」

そういう行為自体は知っているけれど、自分でするはずがない。聞かれていること自体が、消えてしまいたいくらいに恥ずかしい。

「けど、ウイルスは気にしてもいい様子で目を細めた。」

「じゃあ、これが初めてなんだ。嬉しいな」

「……え？ ひやうっ」

「ん、狭いけど……ぬるぬる。痛くない？」

「んっ、あ、やつ、なにっ」

身体の中に異物感がある。痛くはないけれど、苦しいというか、違和感がすごい。息をすることに精一杯になっていたら、指先で何かを押し潰されてまた身体が跳ねた。

「中に僕の指を入れたんだよ。それだけだと苦しいと思うから、ここも触るね」

「ひや……っ、あ、んんっ！」

「美緒は感じやすいんだね」

ちゅっつとまた頬にキスをされたけれど、気にする余裕はもうなかった。ウイルスの指が動くたびに、苦しさとそれを上回る刺激が頭の芯まで響いてくる。

目に溜まった涙が流れて、舌でべろりと舐められた。それだけで、ぞくんと背中が痺れる。